一般社団法人
まちづくりうらそえ

スーパーボランティアにカレーパーティー！？
みんなで支える子どもの未来！

代表の大城さんは、以前は別の団体で地域づくり活動に関わっていたが、そこを退職した後、地元浦添市の児童センターで募集を見つけ、応募。職員として採用され、森の子児童センターに配属となった。

配属の翌年2015年からは、児童センターの運営が指定管理に切り替わることが計画されていたため、その応募に向けて動くことに。申請の準備等、大変なことも多く、正直、勤めているだけのほうがラクだという思いもあったが、同僚からの「大城さんについていきます！」という心強い言葉もあり、決意が固まった。そして、浦添市内の児童センターで指定管理となった初めての民間団体となり、子どもたちのためによりよい運営を目指す新たな体制作りが始まった。

私は2番手、のスタンスで人材育成

児童センターについて触れる前に、まずは代表である大城さんの人柄に着目したい。

元々、和裁士の仕事をされていたそうだが、「縫う人は、織った人の作品を生かすことが役目であり、あくまでも2番手。」との考えがあった。それは、「人の長所を見つけ活躍できる場を作る。その際、いくらかは自分が前に出ても、すぐ後ろにまわりポンと人を前に出す。」という、現在も仕事する上での基本スタンスに繋がっている。いつまでも自分が中心に立つのではなく、若い芽を育て任せていく。

適度な量とタイミングで物事を任せてもらえると、人は一気に視野が広がりメキメキと力を発揮していくものだ。そのいい例としてあるのは、30代の若き館長が、同世代の職員らと取り組んだセンターとしての新たな理念の作成だ。元々あった法人の理念がベースにはなっているが、今の状況や自分たちの想いを込め、皆で再構築したという。こうして組織が活性化することが、センターに通う子どもたちにもいい影響を与えているのだろう。

地域との接点作りから始めた、児童センターの運営

児童センターを運営するにあたり、まず始めにしたことは、近隣の企業や団体、自治会への挨拶まわり。

まずは、自分たちが何をしているか知ってもらうことが大切だと思ったそう。それがきっかけで、勢理客自治会と合同での防災訓練を実施したり、スーパーボランティアとして、毎日の掃除や力仕事を手伝ってくれる頼もしい協力者もできた。市更生保護女性会との繋がりもそ

市更生保護女性会からの差し入れで
カレーパーティー！沢山召し上がれ！

カテゴリー	子どもの健全育成				
住　所	浦添市勢理客1-7-2	電話番号	090-2512-3026	人 数	30名
設　立	2015年「まちづくりNPOうらそえ」⇒ 2017年「一般社団法人まちづくりうらそえ」に団体名変更				
主な活動	浦添市（森の子／宮城っ子）児童センター指定管理、 浦添市母子生活支援施設浦和寮指定管理、浦添市グッジョブ連携協議会事務局				
利用施策	琉球銀行ユイマール助成会、NPOどんどこプロジェクト （子どものための児童館とNPOの協働事業）				

の1つで、昨年は児童のためのカレー350食分の差し入れがあった。すぐに食べきってしまったため、今年は500食分をお願いしてみたところ、少しビックリされたようだが、快く提供して貰った。

子どもファーストな関わりで、あたたかな居場所作りを目指す

ここでは、否定しない・受け入れるスタンスで子どもたちと接している。子どもの口から「どうせ自分の言うことなんて…」という言葉が出た時は、その背景に想像を巡らせる。もしかすると普段、自分の話や言い分を聞いてもらえないのではないか、だったら、まずはこの子の言葉をしっかり聞こう。このように、1人1人の状況や対応策を職員全員で共有し、寄り添っていく。

児童センターの利用は18歳までとなっているが、子どもとの関係はその後も続いていく。里帰りをした際に、菓子折りを持ってふらりと寄ってくれる子もいれば、保育士になってここに勤めたい、と夢を語りにきてくれる子もいる。自己肯定感が低く自信を持てなかったことや、暴言等があった昔の姿を思うと、「成長したなぁ。」と思わず目頭が熱くなるという。

代表の大城さん（右）　0～18歳までの子どもが集う。大人になった後も訪ねてくれる子がいるそうだ。

根底にあるのは、地域づくり

夜間開放もされており、22時まではサークルや会議など地域の方の利用もある。大人の出入りがあるのは、とてもいいことで、お互い顔が分かるからこそ、児童センターの外で気になることがあった時には「気を付けてよー」と声をかけることができる。知っている大人であれば、子どもたちも反発することはない。むしろ、心配されている、気にかけてもらっている、と素直に受け取ることができるようだ。

ここでは児童センターの職員やボランティアはもちろん、各種団体、企業、そして地域の方々が連携することで、子どもたちを見守り、自立をサポートしている。「大事なのは、地域の色んな大人たちが子どもに関わること。だから児童センター運営の根っこは、地域づくりにあるんです。」と、大城さんは語ってくれた。